

第二部：近代文明とラテン文化

篠原ブログ 1～20)

2023 年は、地球温暖化の影響で猛暑となった。また大雨、山火事等の気象災害も合次いだ。更に大きな戦争を抱えて 2024 年を迎えることになった。これからの世界は、どうなるのか？人間は、なぜ戦争するのか？戦争は悪と善の戦いでなく、お互いが正義で憎しみ合い、時には殺し合っている。つまり対立は、排除を生み、排除は恨みを生む。恨みは連鎖しておさまらない。このことは悲しき人間の性で、未来永劫変わらないであろう。今の惨状を見ると悪と悪の戦いであると思えない。

対立は西洋、東洋に係わらず繰り返されてきたが、中国の古典「菜根譚」にこんな諺がある。「古人、貧らざるを、もって宝となす」。これは欲張りの心が知恵を曇らせ、善悪の判断力を失いさせ、人間を愚かにしてしまうのだ、という教訓、戒めの言葉である。

「超約・ヨーロッパの歴史 増補版」から引用：『古代ギリシャ・ローマの世界から現代の EU に至るまでのヨーロッパ文明の特徴とは何であったのか。また、その地域世界は、どのような可能性や問題点を人類社会人に投げかけてきたのか。EU が大きな曲がり角に直面し、苦悩している今だからこそ、そしてまたヨーロッパだけでなく世界全体が大きな文明私的曲がり角に直面しているかもしれないからこそ日本でもこの本が読まれるに価する』

さて PART-2 は、篠原先輩がブログで発信していた「近代文明とラテン文明」を取り上げている。テーマは、ラテン文化とアングロ・サクソン文化の違いを先輩の体験から述べているので大変説得力がある。凡そこんな調子 ↓ で書かれているので、わかりやすい。ぜひ、お読みください。



『私、篠原がスペインに遊学していた時の話である。下宿先のおじさんとの話の中で、”スペインには、赤ぶどう酒(vino tinto)、青い空(cielo azul)、きれいなおねえちゃん(muchacha bonita)がある。この三つがあれば人生、十分ではないか。これ以上望むのは、それは強欲というものだ”。この後、この三つを持たない「イングレス ingles (英国人：正確にいうとイングランド人)」はかわいそうだ、人生の楽しみを知らない、だからあんなに仕事をして世界を支配したがるのだ、云々。イングレスの悪口が続くのだが、おじさんの話は、まことに嬉しくなるような、キリキリと世界を駆けずり回っているアングロ・サクソンや日本人にバケツで水を掛けるような爽快さがある』(以下略)

1.篠原ブログ:(1079) 近代文明とラテン文化(2012/10/01)

我々がその下で息をしている「近代文明社会」は別の呼び方をすれば「西洋(式)近代文明」となる。西洋とは漠然と欧州のことであり、その中を大きく分けるとゲルマン系とラテン系とスラブ系の三つとなる。このように雑な分類をすると、ケルト人(Celtic)の末裔であるアイルランドの人たちから文句が出るだろうが細かいことは抜きにする。

15世紀、16世紀の昔であれば、西洋といえばまず何よりもスペインやイタリアが代表であり、誰もがこれらの地域を真っ先に思い浮かべたであろう。ところが、われわれは西洋と聞いて真っ先に頭にイメージするのはイギリスでありその分家のアメリカ合衆国でありドイツである。中にはもちろん西洋イコール「おフランス」という熱狂的フランス派もいるけれど(最近随分と減ってしまった)、中心はゲルマン系となっている。これはもちろん産業革命以来の大英帝国(Great Britain)および後継者の USA の大躍進の結果である。

話は逸れるが、大英帝国という日本での昔の呼称はこの「Great Britain」から出てきていると思われるが、元々はローマ帝国がその植民地を「Gran Bretania」つまり「ブリテン大島」と呼んだことに始まる。島が大きかったから「Gran」であり、そこには「偉大な」とか「強い」というような意味合いは無い。

ローマ帝国が崩れそうになってこのブリテン島の(今の)イングランド地方に駐留していたローマ軍が大慌てで本国に帰ってしまった後(5世紀)、今のデンマークの南あたりにいたゲルマン族の一派である Anglo 族と Saxon 族が空き家に入り込んだのがこの「大英帝国」の始まりである。つまり、彼らはローマ文明を直接味わったことが無いけれど、なぜかこの Great Britain という呼び名が大のお気に入りであり、今でも国の略号を恭しく GB としている。

それであるから、現在の文明を西洋式と呼ぶのははなはだ明確性を欠くものであり、厳密にはゲルマン式あるいはその代表であるアングロ・サクソン式文明と呼ぶべきであろう。このように分類することによって、ローマ文明の直接的な末裔であるイタリア、スペイン、フランスといったいわゆるラテン系の国(あるいは地域)の人々が19世紀末から始まる現在の近代文明に対する感情を理解する糸口が開かれる。簡単に言えば、これらのラテン系の人々はアングロ・サクソン式文明に複雑な「アンチ」の感情を持ち続けている。またこの文明システムにも根本では馴染んでいない。(2012/10/01)

2.篠原ブログ:(1080) 食事は楽しみ化、労働力の力源か

大昔、マドリッド大学に遊学していたとき、下宿先のおじさんは多くのスペイン人と同じくイギリス人嫌いであり、とりわけその食事と労働に関しては”あいつらアホか?”と、ほとんど罵倒に近い。そのエッセンスは、”俺達(スペイン人)は食べる(楽しみの)ために働く、彼らイギリス人は働くエネルギーを得るために食べる”というものである。

その夏、イギリス探訪と称して、スコットランド人の友人の下宿先(ロンドンから列車で30分ほどのギルフォードという名の郊外小都市)に転がり込んで毎日ロンドンぶらぶら歩きを1週間ほど続けたが、食事には困った。このまま1ヶ月も居たら俺は餓死するのではないかと思うほどに、「食糧」はあるが「食事」がない。仕方なく、大金をはたいて一度だけ中華レストランに行ったが、いやその旨かったこと、涙が出るほどであった。

ゲルマン式(アングロ・サクソン式)近代「文明」の根っこにはアングロ・サクソンの「文化」がある。「文明」とは土地と民族の垣根を越えて、そのシステムを取り入れようとするならば、誰にでも開かれた汎用性を持つものでなければ文明とは称せない。

しかし、そうは言ってもどうしてもその主導集団の「文化」の色合いが混ざっている。もちろん、ここからここまでが文明の領域で、ここからは文化の領域であるといった区分けが明確にできるものではない。

文化とは生活に根ざすものであり、生活の中心は「食べる」ことにある。文明が人々の生活様式に及ぼす影響力は極めて強く、文明の発展の裏側では固有の文化の崩壊が進むのが一般的な話ではある。しかし「食べる」ことに関する文化側の抵抗力は根強いものがある。

他者の文化を受け入れるかどうかは頭の反応ではなく皮膚感覚の反応による。従って、アングロ・サクソン式近代文明を採用するしか他に手は無いなど頭では理解しても、その根っこに臭う文化には感性がアレルギーを起こす場合がある。

だから、生きるという要素の中で「食べる」ことを極めて重く見るスペインの人々にとって、食べることを重視しないイギリス人は自分達の理解の及ばない、なんだか自分たちとは合わないと感じることになるのだろう。そして、その感情が頭の方にまで上ってくると、そのような人たちが主導している文明の方式そのものへの反発につながっているのではなからうか。(2012/10/01)

3.篠原ブログ:(1081)まずい食事と世界制覇との関係

もう40年ぐらい昔のことだったと思うが、イギリスの中年(あるいは初期高齢者?)のおじさんがたった一人、自分のヨットでどこの港にも寄らずに世界一周を果たしたことがある。(この人は後にその栄誉をたたえてエリザベス女王からサーの称号を与えられた。)このニュースに接してあるフランス人がコメントした。”俺達だってそれぐらいやろうとすればできる。(つまり、気力も技能もある。)しかし一人乗りのヨットに世界一周に要する日数分の食糧とワインを積み込んだら船が沈んでしまうぜ。だからやらない。”というものであった。

イギリス人のやることには箸の上げ下げまで難癖を付けるフランス人であるから、これぐらいの負け惜しみは珍しくないが、真理であるかも?。ワイン無しの食事、しかも毎日毎日缶詰と冷凍食品と乾パンでは、想像しただけで大海に乗り出す気力は萎えるだろうことは容易に想像がつく。

今はどうか知らないが私がスペインでフラフラしていた時代では、かの地の人の昼食は、凡そ2時ごろから始まって3時間から4時間かかるので、食べ終わった頃は既に夕刻である。つまり、午後は仕事ができない(するつもりがない?)ことになる。食べるのが生きがいの一つだから当然である。

しかし、これでは10分ほどでサンドイッチの昼食を済ませて仕事にまい進しているイギリス人に「近代工業および金融文明」の下での競争に勝てるわけが無い。いやもともとスペインの人はイギリス人と競争するつもりは無い、といった方が正しいだろう。17世紀、スペイン無敵艦隊がイギリスにボコボコにされて以来、彼らスペイン人はイギリスと張り合うなんて無駄な努力はすっぱりとあきらめたわけだ。

あるいは、競争するには昼飯の時間を切り詰め、しかも午後も頭をすっきりさせておくためにはワインも控えるなどという、あたかも修道僧のごとき生活が必要であると考えた瞬間に、イギリスとの「近代化」競争なんて馬鹿々々しいということになるのだろう。たとえ、イギリスやドイツやアメリカから、お前達は先進諸国中の二流国だとさげすまれても、スペインやイタリアの人たちは気にしないだろう。

俺達の上には青い空が広がり、真紅の葡萄酒が溢れるほどにあり、周りにはきれいなねえちゃん達がわんさといる。あんた達に持っているかね、どうだ、うらやましいだろう、と。(2012/10/03)

4.篠原ブログ:(1082) 効率という言葉はない

スペインはヨーロッパの中で異質である。あるいはスペインからみればピレネーの向こうのヨーロッパはなんか変だ、ということになるのだろう。そのスペインでは「効率」(efficiency)、「効率的」(efficient)という言葉はあるのだろうか。私の手許にある「スペイン基本語5000」という辞書には無い。大きな辞書にはあるのだろうけれど、ともかくポピュラーな言葉ではなさそうだ。

スペインだけでなく、恐らくイタリアでも同じだろう。昔、オリベッティの社長が、“わが社の工場に従業員があのおしゃべりをもう少し控えてくれれば、生産「効率」は少なくとも30%は向上するのだが”と嘆いた話を聞いたことがある。そのニュアンスには非難している風はなく、嘆きながらもお喋り社員を容認している感じがあった。

もう30年以上の昔になるが、このオリベッティの発祥の地、北イタリア(アルプスの南麓)にあるイブレア(Ivrea)という町で奇妙なホテルに泊まったことがある。自分で選んだのではなく、提携先の会社が手配してくれた。なんでもオリベッティの著名のデザイナーが設計したとかで、部屋の中が3階建てでなんだか潜水艦の中にいるが如きであった。

オリベッティは機械式タイプライターの雄でであったが、デジタルの時代に適応することができず消えた。オリベッティは私の好きな会社であった。会社も人間臭く、製品も手作りのぬくもりがあった。しかし、どこを叩いても、「効率的」ではなかった。

「効率」はゲルマン／アングロ・サクソン式近代文明の中心テーマの一つである。効率なくしてこの近代文明は存立しえない。それゆえ、しばしば、人間は「効率」の道具、「効率」の手足としてのみ扱われることになる。

そのため、この文明の最先端を突っ走る社会においては、人は何かの「目的」達成に向けて「効率的に」1時間も無駄にすることなく走ることを要求される。その効率列車に乗り遅れたひとは落ちこぼれとしてフーテンをなりわい(生業)とすることになる。

それだから、イギリスやドイツやアメリカの「効率化の権化」のような人々からみれば、スペインやイタリアはフーテン地域の如くに見えるのだろう。どちらの側が生きることを楽しむわざ(技／業)に優れているかは、ここまで書いてきた中で既に明らかであろう。
(2012/10/04)

5.篠原ブログ:(1083)規律無き幸せ社会

中学生の時、兄に誘われて「長い灰色の線」(The Long Gray Line)(1954年、John Ford 監督)という映画を観に行った。ニューヨークのウエストポイント(West Point)にあるアメリカ陸軍士官学校(US Military Academy)の物語であり、題名は、灰色の制服を身にまとして一列に並んだ士官学校生徒の姿から来ている。

ストーリーはもう覚えていないが、映画のラストで展開される生徒の一糸乱れぬ分列行進の美しさは、まさに息を飲むほどの圧巻であり、涙が出るほどのものであった。

兵士の行進が美しいのはなんと言ってもこの USA でありナチスドイツである。つまり行進はゲルマンに限る、ということになるだろうか。

この映画の印象が強かったためか、マドリッドで観た軍事パレードでの兵士の行進には驚いた。このパレードは1939年3月に全土を掌握した反乱軍(共和国政府への)の勝利を祝して毎年3月に行われていたものである。

私が居た当時フランコ総統はまだまだ元気であり、その総統の臨席の下、市内で最も広い並木道(Avenida)(名前を失念)を次から次へと各種部隊が行進していく。なかでも凄かったのは、フランコの反乱の母体となったスペイン語で「レヒオン Legion」と呼ばれている外人部隊(植民地駐留軍)である。

カーキ色のシャツ(上着は着ていなかった)の胸のボタンを2-3個外し袖を捲り上げてどたばたばらばらと行進していった。この部隊は特別としても、その他もまずまず似たようなものであり、「一糸乱れぬ行進」なんて言葉はこの国には存在しないと悟られた。

規律と訳された元の英語は多分「discipline ディシプリン」であろう。辞書でみると元々は軍隊の訓練から出てきているようである。従って、軍隊こそこのディシプリンの権化のようなものであり、規律に乏しい軍隊は戦闘に弱いというのは事実なのだろう。

(2012/10/05)

6.篠原ブログ:(1084)進歩・進化・発展・成長(2012/10/09)

社会が毎年毎年良くなっていくと考えていたことは幻想に過ぎなかったと、いわゆる先進諸国のほとんどの人は今や理解していると思う。この20年ほどの現状を眺めるにつけ、社会が良い方向へ、豊かな方向へ発展し続けていくという幻想に別れを告げ始めている。

社会が良くなっていくという思い込みは、中産階級が膨らんでいく速度に比例して増えていき、その中産階級がやせ細っていくのに合わせて人々(特に中産階級の)の幻想はしぼんでいく。人間社会は進歩し、進化し、発展し、成長していくという思い込みは、経済成長により自分の生活が(見た目)豊かになっていくという「事実」の裏づけがあつてのことだが……

現在の近代文明の本家であるイギリス、厳密に言えばイングランドの人々にとって、自分達の国が近世から現代に至るまでほぼ一本調子の昇り竜であつたこと、および特にその分家のUSAにおいてはつい最近まで世界の王者であつたがために、この進歩・進化の観念は「常識」であつたように見える。

一方、ラテン系の地域においては、まずその本家のイタリアでは、かの「偉大な」ローマ文明でも滅んだこと、ルネサンス(*)で再びヨーロッパをリードしたけれど、近代になって主導をイングランドに奪われたことを歴史として知っている。

(*)ローマ文明の下での人間らしさをもう一度取り戻す運動を意味する

スペイン地域の人々も、かつての大スペイン帝国が100年ちょっとで長い長い下り坂を転がってきた歴史を持っているから、進化だの発展だの成長だのといった言葉には惑わされない。そして、それ以上の要素として、これら二つの地域の人々は、明日の豊かさを夢見るよりも、今日生きていることをいかに楽しむかに力点を置いている。

歴史的経験とこの生活態度が掛け合わされて、これらのラテン系地域の人々は、進歩とか発展とかの言葉に(自分で)酔うあるいは惑わされることが少なかった。

(*)フランスについては私の知る得るところが少ないし言葉も習ってないので対象から外す

進歩・進化・発展・成長というお題目が、今日では地球資源と環境の限界に行き当たって、“こりゃアカン”となつたがイタリアやスペインの人から言わせれば、“当たり前でしょう、あんな勢いで地球を掘りまくり、大量生産を続けていればそうなるわな”となる。

7.篠原ブログ(1085) 真面目は受けない(2012/10/10)

スペインやイタリアでは真面目であることは「堅物」(かたぶつ)につながる。何事に対しても「まじめに」取り組み、真剣に悩み、本気で対策を考え、定められた規則や法律に従順である、なんて人がこれに当たる。スペイン語でまじめは「serio」(せーリオ)という。感覚として、“冴えない奴”という印象が強い。ともかく、良い評価ではない。

スペインの人が唯一、まじめ(せーリオ)になるのは“真実の瞬間”の時だけである。この言葉は、闘牛士が牛の頸椎に最後の一刺しを与える瞬間から出ている。翻って、自分の死の瞬間を重く見ることにつながる。それまで冗談っぽく生きて来たが、それは自分の最後の瞬間を華と飾る道筋ということにつながるようだ。

話は飛ぶが、マドリの下宿のおじさんから、「神風特別攻撃」を賛美する言葉を何度も聞いた。真実の瞬間を避けて、正面から向かい合って、敵艦めがけて突入する勇気に最大の尊敬の念を込めての賛美である。この歴史一つだけでおじさんの「日本民族」への評価はゆるぎないものになっていて、私などもその恩恵を随分受けたものだ。

なんでこんな話をしているかというと、スペインはどう逆立ちしても現在の文明国家の先頭グループに入るわけが無いということを言いたいがためである。まじめに工業製品の大量生産に励み、明日の豊かさを夢見て、爪に火をともして刻苦精励するなんて生き方は”ばからしい”ということでは、とても G7 の仲間入りは無理である。

スペインでは、まじめすぎる人は「人間性に乏しい」となる。人間性が豊かであることを評価の最上位に置くがゆえに「まじめ」への評価は低いことになる。それと同時に、スペインは「光と陰(luz y sombra)」の国である。上に述べた「真実の瞬間」は生の陰、最終幕であり、それまでの道は光の中にある豊かな生の陽でなければならない、ということである。

アングロ・サクソン式の近代文明は、この「光と陰」の陰影に乏しい。全てがのっぺりとした灰色に覆われている感じがする。「生」の躍動感に欠けている気がする。

きれいなねえちゃんに目もくれず、昼飯は味もわからず急いでかき込み、夜遅くまで仕事、仕事に追われていて、あんた達は楽しいですか、という問いかけが、ラテンの人から出されている気がする。

8・篠原ブログ(1086) ファミリー(2012/10/11)

スペインやイタリアでは(多分今でも)ファミリーを至極当たり前に大事にする。ラテン組はイギリスやドイツとは隣組であるからその実態はよくよく承知であり、しかも文明に関しては俺達の方が先達であると思っているから、そう簡単にはイギリス式、あるいはゲルマン式、あるいは、より正確には WASP 式(White-Anglo-Saxon-Puritan)文明を受け付けない。

それゆえ自分達の文化を維持する力、あるいは抵抗力は日本列島の住人よりはるかに強い。それだから、文化の土台であるファミリーも、いろいろ諸式が WASP 式文明の影響を受けても、そう簡単には壊れない。いや壊さない。

イタリア式ファミリーの典型の一つがマフィアの組織に見られることは誰でもよく知っていることである。

そういえば、江戸末期から明治にかけてのやくざ組織もファミリー形態であった。清水の次郎長一家とか、群馬の大前田英五郎一家とか。そして、更にさかのぼれば、戦国大名の組織もファミリーである。

木下藤吉郎(秀吉)一家において、おかみさん「ねね」が台所を取り仕切り、賤が嶽七本槍で有名になった子飼いの若武者がその下で嬉々として働くという図式である。

なお、台所を取り仕切るということは家計をマネージすることであり、一家の中では絶大な権力と権勢を持っていた。これからもわかるように、日本のファミリーは昔から「かあちゃん」が軸である。

話がラテンから逸れたが、ラテンの人々に見られる「優しさ」、「暖かさ」、「人懐こさ」はこのファミリー基盤にあるのだろう。それに比べて、WASP 式の人々には何か冷たさを感じられる。彼らとは、夜の巷を肩組んで飲み歩くなんてことはとてもできそうにない。「気が許せない」という言葉が浮かぶ。一緒にアホなことをする雰囲気にはなれない。

9.篠原ブログ(1087) 文明に及ぼす文化の陰(2012/10/12)

明治になって「文明」と訳された「civilization」とは何かについて、定義する力を私は持たない。強いて言うならば、一つの集団が生きていくやり方が、初源的なあるいは原始的な集団のやり方と比べて、明らかに洗練されていて、華やかでありかつ魅力的と映る場合に当てはめられるのであろう。

しかし、ここでは、黄河文明とかチグリス・ユーフラテス文明とかマヤ文明といった場合のそれは隅に置いておいて、ギリシャ・ローマ文明から発する欧州の文明を頭の片隅に置きながら、産業革命と近代国家形成で始まる近代文明のみを対象にしている。

文明が文明でありうるには、その文明を展開している一つの集団の生きるやり方を、格好いいもの、素晴らしいものとして自分達にも取り入れようとする集団に対して開かれたものでなければならない。

簡単に言えば、民族や宗教やその他もろもろの文化的な違いに関係なく、感性ではなく頭脳でもって採用するつもりがあれば、いつでも OK という汎用性を持っていなければ文明とは言えない。

このように考えれば、文明は無色透明のように見えるが、その主導集団が持つ「文化」の色合いはゼロではない。近代文明の主導者であるアングロ・サクソンは歴史の舞台に登場してきたのは5-6世紀と新しく、かつ文化のレベルも”たいしたものでは無い”がゆえに、現在のこの文明には文化的色合いが少なく、それだけ汎用性が高いものであったと言えるだろう。

しかし、上に述べたように、文化の影響がゼロではない部分で、この文明に最初から今に至るまで暗い陰を投げかけているものに、この主導者群が有する他者への「差別感」がある。

この「差別」の話題は重いからあまり気が進まないが、ラテン文化と近代文明の関係を語る上では避けて通れないので、これから何回かに分けて、書きながら考えて行きたい。

10.篠原ブログ:(1088) 慣れと差別 (2012/10/15)

私的な話で申し訳ないが、私の母親は生まれも育ちも神戸であり、大正時代の生まれにしては人種的な差別感がまったく無い人であった。多分、当時の日本で最高の国際都市という環境から、世界には様々な人が居ることが子供の頃から当たり前のものとして身につけていたのだろう。一方、私の父は栃木の山奥(昔は)の日光に近い土地の出であり、生涯の大半を商社員として過ごした割には、時折人種的差別感とその言動に表れることがあった。

目の色も皮膚の色も宗教も食事の仕方も、何もかも自分と異なる「他者」を差別する姿勢は、上に述べた例のように、多分に生まれ育った環境が影響する。つまり、自分の周りがほとんどまったく自分と同じようであれば、異なる人に出会ったときにびっくりして、あこがれたり毛嫌いしたり馬鹿にしたりすることになる。

スペインは前2世紀頃ローマの属州となり、ローマ文明の影響下に置かれるようになった。その前の支配者はカルタゴである。そして、ローマが滅んだ後はケルト系のゴート民族が北から入り込んで来て、更には8世紀あたりから15世紀までその国土の大半(北のビスケー湾沿岸を除く)はアラブの支配下にあった。もともとの民族はイベロ族と呼ばれる人たちであるが、その実際はよくわかっていないらしい。

いずれにせよ、スペインは民族と宗教の“ゴチャ混ぜ”が当たり前の土地であった。目の色や皮膚の色が気にならない環境が文化となって定着し、差別感が薄い。

(*)コロンブスに始まるアメリカ大陸の原住民に対する態度と蛮行はその多くが当時の狂信的カソリック(反動宗教としての)の影響によるところが強い。

イタリアには紀元前からのローマ文明の伝統がある。すなわち、ローマの基本姿勢は他民族、他人種を区別することなく仲間にしてしまうところにある。ローマ文明があれほどの広がりを持ったその(多分)最大の原動力はこの他者を差別しない姿勢にある。イタリアの土地で誰でも感じる開放感は、この前世紀からの2千年以上におよぶ伝統のおかげなのだ。**(*)塩野七生(ななみ)さんの「ローマ人の物語」をぜひ読んでください。**

それだから、近代文明に最初からついてまわっている「差別」という暗い影は、(100%とはもちろん言えないけれど)ラテン地域には縁がない。この地域の人々は昔から世界の様々な人に接し、商売し、婚姻し、隣同士で住んできた都会的洗練を持っていたことになる。

11.篠原ブログ:(1089) 対象物としての人間 (2012/10/16)

5世紀、アングロ族とサクソン族がデンマーク半島の付け根あたりの土地を離れ、海を渡ってイングランドの地に入ってきたのは、ローマ駐留軍が引き上げてから直ぐのことだったようだ。今のロンドンあたりを中心としてローマ軍の支配下で細々と生活していた主にケルト族の原住民はすぐに新たな支配者を迎える破目になった。そして、この新しい支配者は、それら原住民と融合することなく、それどころかまったくの劣等種族扱いで単に労働力としてこき使うようになる。

近代文明の根幹には、自分(あるいは自分達)以外のすべて、自然物から生物および人間を対象物(object)として眺める姿勢がある、と私は考えてきている。その姿勢がアングロ・サクソン族の気質に強く係わっていると感じる。彼らアングロ・サクソン族のこの他者への差別観はどこから来たのか。説明のつかない何かがあるのだろう。

同じ白人種であるケルト族に対しても初めから下層民扱いをするぐらいだから、それから千年も経って後、大航海時代が始まって世界に乗り出すや原住民を頭から差別したのは当たり前といえば当たりの反応であった。

これら自分達とは異なる劣等である(はずの)他人種・民族は、彼らの目からはすべてオブジェクトであり、自分達の利益に利用できる・すべき「人間資源／労働力」ではない。そして、それらの「資源」の中に交じり合うことを体質としてできないところから、冷静に合理的に客観的にそれら資源をマネージすることが可能であった。

軍隊の経営、植民地の経営、企業の経営、いずれにおいても彼らのマネージ力が優れていたのは、この冷たい目で客観的に自分達以外の人間を眺められるところから出てきていた、と私は考えている。同時に、この姿勢は他人種・民族の「文化」という価値を一切認めない、あるいは認められない姿勢となっても現れる。認めないといったが、もともと関心が無いと言う方が正しいだろう。関心が無いから、ある文化に惹かれてそこに入り込むなんて危険も出てこない。感情が入り込むことがない。

差別感の話から「マネジメント」の話に広がってしまったが、この日本列島の住人が黒船を見た時(1853年)からまずその工業力に目も魂も奪われてしまった近代文明の根底には、その文明の主導者であるアングロ・サクソンの「他者(たにん)を見る目」が大きな影を落としていることを言いたかった。その陰があったからこそ、この文明はまさに世界規模となり、その結果として、別の暗い影が世界を覆うようになったと言える。

12.篠原ブログ:(1090) 文明と野蛮 (2012/10/17)

文明的、あるいは今の言葉で言えば「文化的」生活とはなんだろうか。その構成要素の大きな部分が社会的インフラ、即ち電気・ガス・上下水道・電話・道路などである。これらのインフラを利用して、水洗トイレ・湯沸かし器・洗濯機・掃除機・冷蔵庫・テレビ・電気オーブン・自動車などなどの「文明の利器」に囲まれて暮らしていれば「文明的生活」を享受していることになる。

この「文明人」が、それらのインフラに恵まれていない地域の人々眺めると、だいたいは差別の心が生まれることになる。大文明は基本的に中華思想であり、周りの住人はすべて「野蛮」と区別されていたようだ。

「野蛮」という言葉がどこから出てきたのか私は知らないが、英語(欧州語)では知る限り3種ほどある。まず誰でも知っているであろう「savage」がある。これは辞書を見ると、uncivilized, uncultivated, uncultured、と意味の説明がなされており、要は非文明的、非文化的ということだ。

その他、野蛮人というときによく使われる単語として「barbarian」がある。この言葉はギリシャ語(barbaros)を語源として、意味は非ヘレニズム(non-Hellenic)、つまり自分達ヘレニズム文明の恩恵に浴していない人たち、つまり野蛮な外国人(異邦人)ということだ。

このように、中国・ギリシャ・ローマ文明の昔から、「文明人」は周辺の「未開」の住人を馬鹿にする性癖があった。

それでも当時の周辺住人は、「俺達は「野蛮人」?と気にしなかったようだ。しかし現在の近代文明となると、なんといってもその機械工業文明が圧倒的であるために、「野蛮」のレッテルをなんとか逃れたいとあせることにもなる。

特、我々日本列島の住人なんぞは、もともといささか軽佻浮薄にして浅慮、簡単に言えばおっちょこちょいのところがあるから、黒船やB-29に気持ちが動転してしまい、この150年必死に「文明人」たらんとあくせくすることになる。もちろん例外もあり、その最たる集団は北米の住人、とんでもない命名でアメリカ・インディアンと呼ばれることになる人たちである。彼らは西洋式文明を採用する気はまったくなく、その拳句、ほぼ「せんめつ」の運命に追いやられてしまった。

13.篠原ブログ:(1091) マネジメント能力 (2012/10/19)

アングロ・サクソン、あるいは範囲を広げればゲルマンの人たちのマネジメント能力は世界で一番である。もっとも、今、「人たち」と書いたが厳密に言えば”エリートの”と言わねばならない。

ここで言うマネジメントは、日本語で言えば「経営・管理・運営」の総合のようなものである。この200年、近代文明が圧倒的な力でもってまさに「グローバル」に展開できたのはまさにこのマネジメント能力の賜物ではないか。

なぜ彼らはマネジメントに長けているのだろうか。長年考え続けて得た結論は、彼らは自分達(エリート集団)以外の他者を人間としてではなく物体として冷静に客観的に冷血に眺めることができるから、となる。そうであれば、人間も自然物と同じように一つの物体に過ぎず、この物体を、感情に惑わされることなく、いかに効率よくうまく動かすかに専念できる。

この物体としての他者はなにも他民族だけでなく、国内的には、同じ民族であっても、非エリート集団がそれに当てはまる。彼らの目に映る他者である劣等民族と劣等階級民をどのようにうまく働かせるか、それがマネジメントである。

物体として眺めているので、他者という存在は当然自然科学の分析の対象となる。そうであるから、彼らエリートが編み出した「経営学」は自然科学の範疇に入れてもおかしくない。

その経営学の構成要素は、石油や鉱石などの自然資源、お金、機械設備および人間であり、すべて無機質の存在物として同じまな板の上で料理できることになる。そうであるから、雇った人間に払うお金は報酬ではなく、「人件費」であり経費の構成要素の一つに過ぎない。(* 自分達エリートは報酬を受け取る)

この構成要素の一つである人間(他者)がどのような感情を持つ存在であるかなどに彼らエリートは、従って、まったく関心を持たない。物体が感情を持っているということさえ彼らにとっては不思議ということになるろうか。

このように自然科学者の冷徹な目でもって、従業員とか兵士を眺めることができ、更には市場のお客も無機質な構成要素の一つに過ぎない存在として眺めることになる。

従業員とか兵士を最小経費で最大成果をあげさすためには、そこに詳細なマニュアルが用意される。その中には、平常運転時だけでなく非常時の対処の仕方も詳細に記述されている。いつも無事これ平穩というわけには行かないことを彼らエリートは重々承知しているから、非常事態への備えもおこたらない。異常時にはこれら従業員や兵士はとかく浮き足立ちうろたえる存在であることを重々承知しているから、例えば訓練においても異常事態への対処に力が注がれる。

あるいは、兵士というのは基本的に臆病な存在であることを自然科学的に冷静に分析して承知しているから、例えば敵よりも優秀な武器を持たせる。またいつでも助けを呼べる安心を与えるためにも、優秀な携帯の無線送受信機を分隊単位で支給することもその一つの例である。

(*)旧帝国陸軍の単発の38式歩兵銃と米軍兵士に与えられていた自動小銃の違いが一つの例である。

ラテン地域の人々がマネジメントにおいてまったくこのアングロ・サクソンに齒が立たないのは、自分達が人間的であるから他者も同じように人間として眺めてしまうところにある。共に生きる存在として扱ってしまうからである。簡単に言えばマネジメントに感情が入り込んでしまうからである。

近世まではマネジメントすべき範囲も、そこそこの大きさであったから、まあそれでもなんとかあったが、フランス革命以降の近代国家と産業革命以降の大工業となると、ラテン式ではもう手に負えなくなった。

自分以外のすべての存在をオブジェクト(object)として冷静に客観的(objective)に分析するところから近代科学(原理追求)およびその応用の技術がとめどもなく発展したのが近代文明である。

そして同じように、人間もオブジェクトとして冷めた目で眺め効率的に動かして最大利益を上げるための方法、自然科学の一つとしてのマネジメントがその文明を支えるものとして練り上げられてきた。このマネジメントにもっとも適性を持っていたのがアングロ・サクソンを先頭にするゲルマンであった。

14.篠原ブログ:(1092) 自営業・農・工・商 (2012/10/24)

自営農、自営漁、自営工、自営商という存在は中世から存続してきた生業であるが、近代文明の暴風雨の前に、いわゆる先進諸国地帯では、壊滅的な様相を示している。街を見渡せばスーパーとコンビニにと居酒屋チェーン店だけという殺風景な姿を示している。

自営なんとかという生業(なりわい)は基本的に実入りの少ない業である。家族総出で忙しく立ち働いてもその収入は少ない。しかしそこには家族がある。これらの伝統的生業を続けてきた家族は今、どこでどうしているのだろうか。

近代文明の旗印の一つである「大規模」の前に、抵抗する側の力は弱く、近隣の住人からの支援も援軍もこなかった。「大規模」は良いことだと洗脳されてしまっているから、地域でこれまで慣れ親しんできた八百屋さんが店をたたんでも心が痛むことがなかった。駅前の商店街を「シャッター街」にしてしまったのは、昨日までそこで買い物していた近隣の住人自身の態度が強く影響しているとも考えられる。

(*)大規模小売店法ができたからだけではない

そういう中で、頑固に自営なんとかという生業を守り通している地域にスペインとイタリア(多分フランスも)がある。そこでは、町、街、村というコミュニティの連帯が強く、更に家族というつながりを大事にするから、近代文明の「大規模」への大きな抵抗勢力として存在し続けている。あるいは、別の面から言えば、彼ら(スペイン、イタリア、フランス人)は「大規模」にアレルギーを持っているかに見える。大規模イコール人間的つながりの喪失ということを直感的に理解しているから、「大規模」という旗にさほどの魅力も感じない。

更にみれば彼らは大規模システムの運営は苦手であるとも言える。そのようなシステムに巻き込まれては、葡萄酒飲みながらうまい食事をお喋りしながらゆっくりと味わう時間、即ち生活の最も重要な要素の一つを捨てなければならない。だから、本真面を取り組むつもりにならず、それが苦手という現象で現れているだけかもしれぬ。

近代文明を最もよく表現する言葉は、多分、「破壊」であるが、自営農・漁・工・商の破壊は地域人間社会から温かみを奪い、無機質的な地域社会に変えていくことになった。その無機質の社会に住んでいると、ラテン地域がまだ保っている何やら「温かい」ものに、多くの人々が惹かれることになる。がんばってくれ、ラテン！

15.篠原ブログ:(1093) ラテンの物づくり／自営工 (2012/10/25)

20世紀初頭、ヒコーキという flying machines が大空を飛び始めた頃、フランスは次々と革新的アイデア満載の機種を出して、業界の先頭をラテン走っていた。ところが、第一次世界大戦という、アジアから眺めるとなんだか訳がわからない大戦争が始まると、フランスの軍用機は早々と姿を消してしまい、欧州の空の戦いはドイツ対イギリス、そして後期にはアメリカが参戦してきて、ドイツ対英米連合の戦いとなってしまった。つまり飛行機もその操縦士もゲルマンの戦いとなってしまったわけだ。

何しろ、戦争ともなると武器の数が勝負でもあるから、フランス風の1機ごとの手作り風の、あるいは芸術風の作品では歯が立たなく工場で“あんぱん”を作ると同じ型の武器をドンドン生産できるか否かが勝敗を分ける。ところがフランス人は、この大量生産が苦手なのだ。

1960年ごろ、フランスのドゴール大統領の公用車はシトロエンであった。国粋主義者のドゴールが間違っても外車に乗るわけがなかった。シトロエン車は油圧で車高が変えられるという新機軸で当時は有名であった。ところがアメリカ、ドイツメーカーのエンジニアがその技術をチェックするべく解体を始めたら、油圧装置よりもエンジン周りのごちゃごちゃの配線にぶったまげた、という話を聞いた覚えがある。どうやらシトロエンの設計者の頭には大量生産の考えはなかったらしい。

工場での大量生産が苦手なのは、このフランスだけでなくイタリアもスペインも苦手のようなのである。彼らにとってのモノづくりとは、小さな工場で念入りに手作りを楽しむことを意味するのだろう。それだから、食べるものにおいても、工場で量産された食パンをスライスして電気トースターで焼いて食べる(英国式)ことよりも、パンは職人が手でこねて長細くして焼き上げるものであり、それ以外はパンと認めていないのではないか。

ゲルマン系の人々が作り上げ世界中に広げてきた、この近代文明方式を何の疑いもなく「ステキ」なものとして素直に受け入れてきた、この日本列島の住人も、そろそろ大量生産品に飽きがきはじめている。もっとも、すでに長年にわたる同一規格の大量生産品に慣らされているので感性が麻痺してしまい何の疑問も抱かない人も多いようだ。

それらの人の目を覚ますためにも、工場大量生産に目を向けず、あいも変わらず、しこしこ手作りにほげんで、それでもまあ何とか食べていけるラテンの人々の生き方にもっと光を当ててみる価値は十分にあるのではなからうか。

16.篠原ブログ:(1094) 手で作り出す感性 (2012/10/26)

一般的に言えると思うが、日本列島で生まれ育った人とラテン地域の人はその感性で似ているところがあり、私だけではないと思うのだが、日本人はイタリアとかスペインに旅すると何かホットした安らぎを感じるはずである。イギリス(イングランド)とかUSの東海岸を旅したときに感じる肩から首筋にかけての緊張感をおぼえることはないはずである。

そのなにかホットする感じがどこから出てくるのかなかなか難しいところだが、両者とも手作りが好きで上手であるという面が、ホットする要因の一つであることは間違いないと思う。(ひょっとして自分だけかな?)

近代文明の怒涛の如き波に覆われてしまったこの日本列島であるが、手工業と訳されているマニュファクチャリング(manufacturing 今は製造全般を指すようになってしまっているが)がまだなんとか残っているのはありがたい話である。一方、アングロ・サクソン式文明様式に思想においても感性においても、更には体質的にも反撥が強いラテン地域では、この手工業は根強く生き延びている。

例えば、高級車で有名なフェラーリ(Ferrari)、マセラッティ(Maserati)、アルファ・ロメオ(Alfa Romeo)といったイタリア車は、残念ながら今はアングロ・アメリカン流を身に付けたフィアット(Fiat)の傘下に取り込まれてしまったが、近代工業の大量生産の象徴である自動車製品としては、「手作り」の香りが強い。それがまた魅力で金持ちが高いお金を嬉々として払う因となっているのだろう。

この手作り風自動車を別にすれば、ベネチア得意のレース編みであれスペインの陶器であれ、その素材はほぼすべて自然素材であり、作り上げた人の手のぬくもりとあいまって人に温かみを与えることになる。また、手工業製品の多くは家族経営の下で作られており、それがまた手に取る人(買う人/使う人)に温かさを伝えることになっていると思われる。

17.篠原ブログ:(1095) ワインとビール (2012/10/29)

酒は有名銘柄よりも聞いたこともないようなラベルのものが良い。弱小無名の銘柄こそ手造りの産物であるから、そこには温もりがあり機械製造の冷たさはない。

私事で恐縮だが、私の母の実家は江戸時代から続く兵庫県灘の造り酒屋であったが、著名銘柄の大手ではなく、全国ブランドからは程遠い中堅以下の存在であった。それでも問屋に卸す酒のすべてが自社製造品ではなく、地方の零細造り酒屋から買ってきた酒(「樽買い」と呼ばれた)を混ぜて卸していたらしい。電機・機械メーカーでいう OEM 製品の組み込みである。零細メーカーは自社ブランドで流通に流す資金も不足しているし、OEM で流せば在庫品を抱える心配もないので、このような関係が成り立っていたのだろう。中堅以下の酒屋でこれだから、灘の酒として有名な全国ブランドともなると、どれほどの OEM 製品が混じっていたことやら。

話が主題からそれそうになったが、ラテン地域(イタリア、スペイン、フランス)の酒はワインでありゲルマン(ドイツとイングランド)の酒はビールである。もちろんドイツにもライン川(Rhein)流域で産するラインワインがあり、ライン川の支流のモーゼル流域の Mosel ワインなどは日本でもよく知られている。しかし、これは例外的存在であり、ドイツではなんと言ってもビールであろう。最も、北部のドイツ人はそれほどビール愛好家ではないのかも知れない。昔、勤めていた会社がハノーバーの国際見本市に出展したとき、ブースの説明員としてアルバイトで雇っていた地元の女子大生はほぼ全員、ミュンヘン式のどでかいジョッキでの“ガブ飲み”を毛嫌いしていた。

(*)会場内にあったミュンヘン式ビアホールで打ち上げやろうかと持ちかけて総スキャン食ったのでこの話は確かである。

イングランドはビールだけである(ウイスキーはスコットランドとアイルランドの産物)。スタウト(stout)と称される黒茶色のビールはお世辞にもうまいとはいえない。それ比べれば、ワインは天国である。スペインの庶民が家庭で飲む名もないブランドの赤ワイン(vino tinto)こそ絶品と言える。手造り製品には温もりがあり、それを手にする、あるいは口にすることが最も贅沢であるという話をしたかった。

今は、日本でも、灘や伏見の酒の神話が薄れて、全国各地の小規模酒屋の酒が豊富に出回るようになり、まことに結構な話である。有名ブランドに惑わされない本物志向の愛好家がまだまだ大勢居る証拠と言えよう。

18.篠原ブログ:(1096) アラブ・イスラムとラテン (2012/11/01)

職業に貴賤は無いと言われるが、漁師という仕事は高貴である。若い頃、漁師に憧れていたのもそのように思うだけかもしれないが、海という自然の中で魚という獲物を追い求めて生きる「狩人かりうど」という職業形態には高貴な香りが付きまとう。

同じように、遊牧の民にも「高貴」という香りが感じられる。地の果てまで広がる大地の上で馬や羊と共に牧草地から牧草地へとさまよいながら生きる姿には気高さがある。遊牧の民が誇り高いのも当然であろう。

アラブ・イスラムの人々が誇り高い人たちであることは、多分、この遊牧という生活様式に関係していると、私は思っている。同時に、現代の文明様式を受け入れる素地が最も薄い人々とも思う。アラブ・イスラムの人から見れば、多分、この近代文明の下での生き方は受け入れにくいであろう。

昔、地中海はラテンとアラブ・イスラムの人々の交流の場であった。交易と呼ばれる物の交換だけでなく、美術から学術(哲学や科学や数学などなど)、つまり感性と知性の交流の場でもあった。キリスト教の下で欧州が中世という暗黒の千年を過ごしている間、ギリシャ・ローマの知性を受け継ぎ残してくれたのはアラブ・イスラムの民であった。その知的財産の多くがアラビア語に翻訳されていたおかげで、それらをラテン語に戻すことによってどれだけルネサンスの力となったことであろう。

その一つを見ても、ラテンの人々にとって、アラブ・イスラムの民は大昔から付き合い合ってきた「隣人」であり、その存在に何の違和感も無いはずである。特にスペインは、中世の700年間、国土の大半がアラブ・イスラムの国家経営の下にあった地である。多分、誰の家系でもさかのぼっていけばアラブのご先祖に出会うことになるだろう。

ところが、近代文明の主役であるアングロ・サクソンの人たちが欧州の表舞台に立つようになったのはせいぜい18世紀の初めであるから、アラブ・イスラムとの接触はほとんど経験してこなかった。

地中海世界の支配層であったアラブ・イスラムとラテンの人々は、言ってみれば花の都の都会人であり、多様な民族、多様な文化、多様な思想、多様な芸術が日常生活の場で当たり前であった。それに比べて、アングロ・サクソン(広くはゲルマン)の人々は多様性に縁遠い田舎人というしかない。

19.篠原ブログ:(1097) 自営業と根こそぎ漁船団 (2012/11/02)

私の知識の範囲では、イタリア、スペイン、フランスに大規模漁業船団は存在しない。底引き網とかいう海底から海面までの水中に生息する魚類を「根こそぎ」捕らえるなどの大規模漁法は、日本、中国、韓国、台湾、カナダ、USA、ノルウェイといったところのお家芸であり、ラテンの民の影はここにはない。

(*)ビスケー湾から北海にかけて活躍するスペイン北部のガリシアの漁業は例外かも？

太古の昔から漁業は小規模経営で行われ、それは表現を変えれば家族経営を軸にしての漁村という共同体の協同経営であった。従って、その活動範囲はほとんど沿岸漁であり捕獲高もたいしたものではない。そのような、人類で最も古い職業の一つである漁師の活躍の場に、近代文明という波が押し寄せ、大きな資本(お金)でもって大きな船と最新鋭の漁具で武装した船団が大洋を我が物顔に走り回るようになった。いつ頃からであろう。小林多喜二が小説「蟹工船」でこの大船団で働く労働者(漁師ではない)の過酷な労働を描いたのは戦前のことであったから、20世紀も早い時期から存在したのだろう。

あるいはもっとさかのぼれば、19世紀後半のアメリカやノルウェイの捕鯨船、鯨の油を取るためだけで、彼らの子孫が今大好きな、鯨をあわや根絶やしというところまで捕り尽した漁業は、近代的ビジネスのはしりであったとも言えるかもしれない。

大資本・大船団・近代漁法の魚とりは、他の近代文明の局面と同じように、破壊をもたらした。その破壊の第一は、家族経営漁師の破産である。第二は、魚を取りすぎて大洋が空っぽになりつつあるという大破壊である。もちろん、近代工業社会が空中に撒き散らすごみのために、海水の温度が上がり、更に酸性化が進んでいるという側面からの魚類絶滅化もあるが、なんと言っても「一網打尽」という仕業が恐ろしい。第三の破壊は、遠洋大規模漁業を可能にした冷凍技術とその大型設備により、家庭の食卓に現れている。

小さな漁船から港の魚市場、そして町の魚屋から家庭へという鮮魚ルートが無くなり、冷凍魚は工場で加工され、原型をとどめず切り身となってスーパーに並ぶという仕掛けになってしまった。おいしい魚を家庭で料理して食べるという「文化」が破壊されてしまった。自営漁という大昔からの高貴な職業は消えていき、生きのいい沿岸の魚も家庭の食卓から姿を消してしまった。

20.篠原ブログ:(1098) ラテンと日本 (2012/11/06)

私がラテン文化に漠然と惹かれるようになったのは大学生の頃だから、それからもう半世紀ほどの時間が流れた勘定になる。それまで、ガキ(中学生)の頃から日本文化にはまり込んでいたのだが、どうにもその湿度の高さが鼻についてきて、その反動で湿度の低い、カーンという乾いた音が青空に抜けるような印象がある「ラテン」に心が傾いたのかも知れぬ。

もちろん今でも「日本的なる心」に大きな期待を持ち続けてはいるのだが、それと同程度に「ラテンの心」への期待度も高い。何の期待かと言うと、そこには現代の文明を超えていく起動力が潜在的にあるだろうということだ。

現在の近代文明社会が、特にそれを強力に推進してきたいわゆる先進地域において、行き詰っていることは深く考えなくても多くの人を感じているところであろう。そしてまた、その行き詰まり感は、これといった明確な解決策がどこにも見えないことで更に深くなっている。

なぜ解決策が出てこないのか。その理由はある意味で簡単である。つまり、今までの考え方ややり方の延長線上では何をどうしても解決の道が見えてなくなっている。ステージがそこまできてしまったと言える。

この「あいあーる村塾」の場で、私は、自分の頭で考える重要性を説き、何度も”まず現状分析から出発すること”と述べてきた。そのことは、国の政策に最も典型的に現れているように、現状分析無しに、つまりこれまでの経過をマナ板に載せることなく、単なるその場の思いつきの如き政策／計画／作戦の提出は事態を悪くするだけであり何の解決にもならないという主張においては間違っていないはずである。

しかし、いかに現状分析をやっても解決策が出てこないという状況になると、もう一つ突き抜けたアプローチを取らねばならないだろう。つまり、これまでの考え方、ものの見方、仕組みの基本などなど、簡単にいえば既存の土俵の上で何をどう料理しても答えは出てこないというところから、大きく飛び上がって違う土俵から考え直すことが必要になるということだ。

ゲルマンの一派であるアングロ・サクソン(A・S)が現文明の土台を築き推進してきたが、それであるがために、彼らはその成果を捨てて突き抜けることはできない。少なく

とも期待できない。突き抜ける、つまり土俵を変える、視点を変える可能性を持っているのは、もちろんこれは私のまったくの独断であるが、この日本列島の人々とラテン地域の人々である。

元来、この列島の人々は、アングロ・サクソンとはまったく異質の文化社会の中に、有能であるがゆえに、うまくあるいは見事に彼らアングロ・サクソンが主導する文明形式を取り込んできたのだが、本家とは異なるがゆえに、捨てることのできる可能性を持っている。

ラテン地域の人々は、ここまでのシリーズであれこれ考えながら書いてきたように、このアングロ・サクソン文明に反撥しながら、しかし生きていくために仕方なしにある程度は取り込みながら来ているので、これまた突き抜ける可能性を十分に持っている。

もっとも、私の考察は十分ではないので、ラテン文化シリーズはここで一度打ち切り、もう一度日本列島に戻ってみることにする。この列島は「職人のくに」であると私は考えているので、その角度から、シリーズのサブタイトルを「職人のくに」として、明日からしばらくの間考えて行きたい。

このシリーズは、多分察せられているとおり、わがニッポンはどうなのだということを常に頭に置きながら書いてきた。

おしまいに落ちを: ラテン地域の人々がこの文明の主導者でありえた可能性はゼロであるが、仮にそうだとしたら、この近代文明の姿は大きく異なっていたであろう。人間性が豊かで、しかしシステムもマネジメントもハチャメチャの文明という姿がそこにあったことだろう。